

COLT 45 AUTOMATIC M1911

M1911拳銃はその名の通り
今からおよそ110年前に採用され、
二つの世界大戦、朝鮮、ベトナムと戦い続けた
軍用拳銃の大ベテランである。
この拳銃は新機構と新素材が盛り込まれた
今日のさまざまなライバルの中にあっても
存在感をまったく失わないどころか、
さらに輝きを増しつつある。
その秘密を歴史的な資料と
ユーザーの意見を通して紐解く。

Text/Ken Nozawa

Illustration/M.Kelly
Photo/US Army, US Marine Corps, US Navy, DoD,
NARA, Library of Congress, New York Public
Library, and WPP Collection
Source/US Pat. No.984519, Basic Field Manual:
Soldier's Handbook: FM 21-100 July 23, 1941
図版解説／鈴木健太郎

参考資料／ワールドフォトプレス 1980年11月発行『世界の銃器・コルト拳銃編』 ワールドフォトプレス 1979年3月発行『世界の最新GUN図鑑 ザ・スーパーガン』 DESCRIPTION OF THE AUTOMATIC PISTOL, CALIBER .45 MODEL OF 1911 WITH RULES FOR MANAGEMENT, MEMORANDA OF TRAJECTORY, AND DESCRIPTION OF AMMUNITION TM 9-1005-211-35 PISTOL, CALIBER .45, AUTOMATIC M1911A1 WASHINGTON GOVERNMENT PRINTING OFFICE 1907 REPORT OF BOARD ON TESTS OF REVOLVERS AND AUTOMATIC PISTOLS FM 23-35 COMBAT TRAINING WITH PISTOLS AND REVOLVERS

M1911A1

Photo & Text by Tomo Hasegawa (P18~22)

米軍制式採用拳銃として幾多の戦場、過酷な最前線を戦い抜いた歴戦の勇士。仕様変更が繰り返され、戦闘銃として性能が極限まで高められた。写真は1943年製と伝聞される1挺。第二次世界大戦の真っ最中、コルト社で作られた軍用銃“GIコルト”。





**100年以上に渡って大型自動拳銃の
王座に君臨するコルトM1911。
兵士たちは最大級の敬意と親しみを込めて
この拳銃を“ナインティーンイレブン”、
あるいは単に“フォーティーファイブ”と呼ぶ。**

.45ACPは9×19mm弾を使用する拳銃がスタンダードになっている現在「あれほどのパワーは要らない」という意見こそあるが「時代遅れである」との声はほとんど聞かれない。そしてM1911は一度退役したにも関わらず、小改良を加えたMEU (SOC)、M45A1の各モデルがアメリカ軍の一部の部隊でふたび制式品となっている。M1911はダブルアクションやポリマーフレームといった現代の拳銃のトレンドを備えている訳ではないが、ひとたび手にすればこの拳銃が“原点にして頂点”であることがはっきりと分かる。どんなシチュエーションでも確実に決定打を与えられる拳銃が求められるとき、M1911がもっとも魅力的な選択肢であることは採用から110年が経った今も変わりは無い。





鬱蒼としたジャングルを進む第5特殊部隊グループのヘンリー・シエルトン中尉。タイガーストライプの迷彩効果とCAR-15(XM177)の軽便さが良く分かる写真である。ベトナムでは迷彩服とCAR-15のどちらも好評を博していたのだが、その支給は特殊部隊員や偵察隊員などに限定されていた。1967年 ラオスとの国境地帯

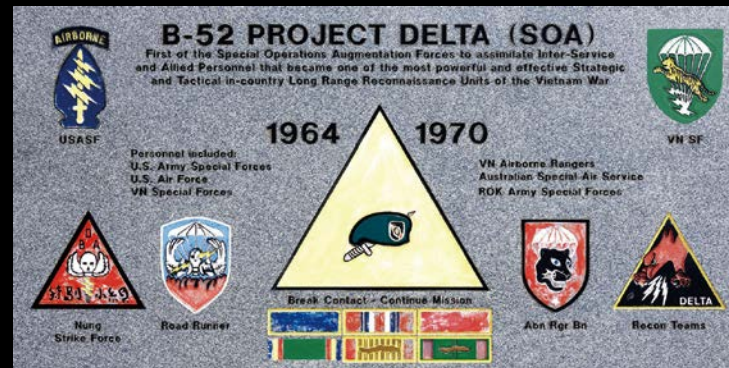
プロジェクトデルタ 偵察マニュアル

Part 1

—ベトナムにおける長距離偵察のA to Z—

ベトナムで解放戦線と北ベトナム軍を何度となく出し抜いた偵察部隊。彼らが実戦での経験に基づいて編み出したマニュアルの内容を、当時とベトナム戦争後の写真を混じえて詳しく解説します。マニュアルに記された数々のノウハウは現代の特殊作戦にも十分に活用できるものです。

文／鈴木健太郎 U.S. ARMY, USAF, USMC, AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, WPPアーカイブ



フォートブラッグにあるプロジェクトデルタのモメンリアルストーン。アメリカ陸軍特殊部隊、南ベトナム陸軍特殊部隊、南ベトナム陸軍空挺レンジャー部隊などの記章が彫られ、オーストラリア軍SASと韓国陸軍特殊部隊からもプロジェクトへの参加者がいたことが分かる。アメリカ軍はデルタ、ガンマ、シグマ、オメガの計四つの長距離偵察プロジェクトをベトナムで実施していたのだが、その全容は未だに明らかになっていない。

はじめに—— プロジェクトデルタとはなにか

プロジェクトデルタはアメリカ陸軍特殊部隊と南ベトナム陸軍特殊部隊LLDB、そして民間不正規戦グループCIDGIによって実施された長距離偵察に関する共同プロジェクトである。1964年から始まったこのプロジェクトは大きな成果をあげ、1966年にはプロジェクトデルタを拡張する形でMACVリーコンドースクール(南ベトナム軍事援助司令部指揮下の偵察コマンド養成学校)が開校すると、当時一般部隊でも編成と運用が進められていたLRRP(Long Range Reconnaissance Patrol=長距離偵察部隊)の隊員の多くがこのスクールでゲリラ戦、潜入および脱出、サバイバルなどの特殊技能を身につけた。プロジェクトデルタの経験が集約された偵察マニュアルは、現代の戦闘に携わる特殊部隊員やコマンド隊員にとっても示唆を与える内容となっている。

—偵察隊員の携行品リスト—

長距離偵察任務におけるノウハウをより深く理解するには、このマニュアルが作られたベトナム戦争時の偵察隊員がどのような物をどのくらい持

って出撃したのかを知る必要がある。

以下に偵察隊員の主な携行品を示す。

- ・M16あるいはCAR-15(18発入りの20連弾倉を18本から20本)
- ・破片手榴弾(4~6個)
- ・発煙手榴弾(最低1個)
- ・白燐手榴弾(1個)
- ・催涙(CS)手榴弾(1個)
- ・クレイモア地雷(最低1個)
- ・地図
- ・C4あるいはC4の代わりとなる爆薬(1/4ポンドのブロックまたはそれ以上)
- ・導爆線と雷管
- ・乾燥レーション(1日あたり2個)
- ・水(最低2クォート)と浄水錠
- ・ストロボライト(チームリーダーとアシスタントリーダー)
- ・シグナルミラー、ペンフレア、シグナルパネル(一部のメンバー)
- ・PRC-25あるいはPRC-77無線機と通信指示書(一部のメンバー)
- ・URC-10無線機(一部のメンバー)
- ・無線機の予備バッテリー(一部のメンバー)
- ・スターライトスコープ(一部のメンバー)
- ・オリンパスペンEE、あるいはボラロイドカメラ(一部のメンバー)
- ・血清アルブミンあるいはそのほかの血液製剤(一部のメンバー)

南ベトナム陸軍のレンジャー隊員がスナッチ(捕虜獲得)の技術を学んでいるところ。長距離偵察部隊の主な任務はその名が示すように情報収集だが、スナッチやハンターキラー(敵部隊の殲滅)などの任務もこなしており、その実情は長距離偵察というより特殊偵察と呼ぶべきものであった。



(上) プロジェクトデルタの本拠地と同じニャチャンに置かれたMACVリーコンドースクールの正門。看板がタイガーストライプ迷彩に塗られているのが非常に興味深い。このスクールは一部の受講生が命を落とすほど危険なカリキュラムにより「あの世に一番近い学校」と呼ばれていた。(右) AK-47の習熟訓練。ベトナムでの偵察任務ではM16/CAR-15など自軍の正規品に加えて敵からの鹵獲品、サイレンサーを付けた改造サブマシンガンなどあらゆる武器が使われた。

- ・双眼鏡(一部のメンバー)
- ・モルヒネ、抗生物質、アンフェタミン、鎮痛剤、下痢止めなどの薬剤
- ・大型ナイフ(官給品のサバイバルナイフあるいは市販の物)
- ・レンザティックコンパス
- ・防虫剤
- ・カムフラージュ用ペイントスティック
- ・ラベリングロープ(長さ6フィート)とカラビナ2個
- ・革手袋
- ・予備の靴下、ボンチョライナー、スリーピングセーターなどの衣料品
- ・M79グレネードランチャーやM60機関銃に用いる予備弾薬(任務によって変化する)



任務を終え帰還する海兵隊の偵察チーム。チーム編成はチームリーダー、アシスタントリーダー、RTO(ラジオ、テレフォン、オペレーター)、グレネーダー、現地人通訳などを含めた6人編成が一般的で、任務によって4~12人と変化した。



ベトコンを探せ!

NIGHT HUNTER OPERATION

Part 6

闇夜にベトコンを狩る「ナイトハンターオペレーション」では、スプリット秒単位での時間合わせが必要だった。司令部に置かれたマスターウォッチを前にして、作戦参加者全員が「ハック」のかけ声とともに、時計の時間合わせをする。そのための秒針を止めることができる時計の原型は、第2次世界大戦にタイプA-11として完成していた。

写真 / US Army, US Marine Corps Archive, and DoD

日中に行なう通常の偵察任務は、OH-6Aが行った。UH-1Hは高度約100フィートを維持して、目標エリア内をあちこち飛行して、偵察任務役のヘリをアシストした。集中的な夜間照明は、UH-1H「ファイヤーフライ」機が担当した。

初日の夜間作戦では、UH-1H「ファイヤーフライ」機による照明は使わずに、2個のスターライトスコープを使ってターゲットエリアの索敵任務を実施した。これは、非常に不満足で、残念な結果で終わった。というのも、ヘリコプターは振動が激しい。その上に、高速で飛行して

いる。そうした状況のなかで、視界が狭いスターライトスコープを使うのは、とてもではないが良好な成果は得られなかったからだ。以後のミッションでは、砲兵隊が打ち上げる照明弾と、UH-1H「ファイヤーフライ」機が使われた。初日の夜間ミッションに加えて、ヘリコプターからフレアーを投下する試みも行なわれた。これも、砲兵隊による照明弾とくらべると、満足できる結果にはならなかった。ターゲットエリアを十分に明るく照らすためには、フレアーを積んだUH-1Hを、もう4機よけいに飛ばす必要がありそ

うだった。ただし、それほど多くのヘリが上空にいると、空が大混雑して、ミッションの効率が落ちてしまいそうだった。

作戦を実施した4晩すべてを通じて、最初の照明弾が打ち上げられた後に、標準的な日中騎兵戦術が実施された。

ミッションを完了させたヘリは、戦術的に明るく照らされているエリアに戻ってきた。そのエリアでは双方向無線機が使え、給油所と再武装パッドが2カ所あった。2カ所の再武装パッドには、それぞれ多種多様な武装が予めストックされてい

た。2.75インチロケット弾は、10ポンドと17ポンドのVTを各100本ずつ積み上げて、2つの山ができていた。40mm手榴弾が250発、7.62弾が4,000発。銃弾装填済みの7.62ミニガン用アモボックス2個はOH-6A用であり、これも再武装パッドに用意されていた。

2カ所あったこの再武装パッドそのものの補充は、近くにあったメインのアモポイントから受けていた。

5000ガロンの燃料備蓄を持つ標準的な、ミニボンブ再給油ポイントが使われた。このミニボンブがおかれた施設は、航空戦力の機動力が必要

闇夜に閃光が放たれる。それは、ナイトハンターオペレーションが進行中という証である。デルタでの作戦遂行のため、米艦船セントフランシスリバー号がファイヤーサポート役として参加。1969年7月

SHOT SHOW 2023

●Report by Muneki Samejima

世界最大規模の銃器見本市として知られるSHOT SHOWが今年もラスベガスで開催された。個人的に感じるのは、ここ数年驚くような新しいコンセプトの製品を発表するメーカーが減っている、ということ。今年も正直大きなトピックはなかった印象だ。とはいえ、トレンドのスライドにダットサイトを直付け可能なハンドガンや素材を変更したバリエーション展開など気になるモデルも多く見かけた。それでは、今年も新製品を中心に2023年のショット・ショーの様子をご覧ください。



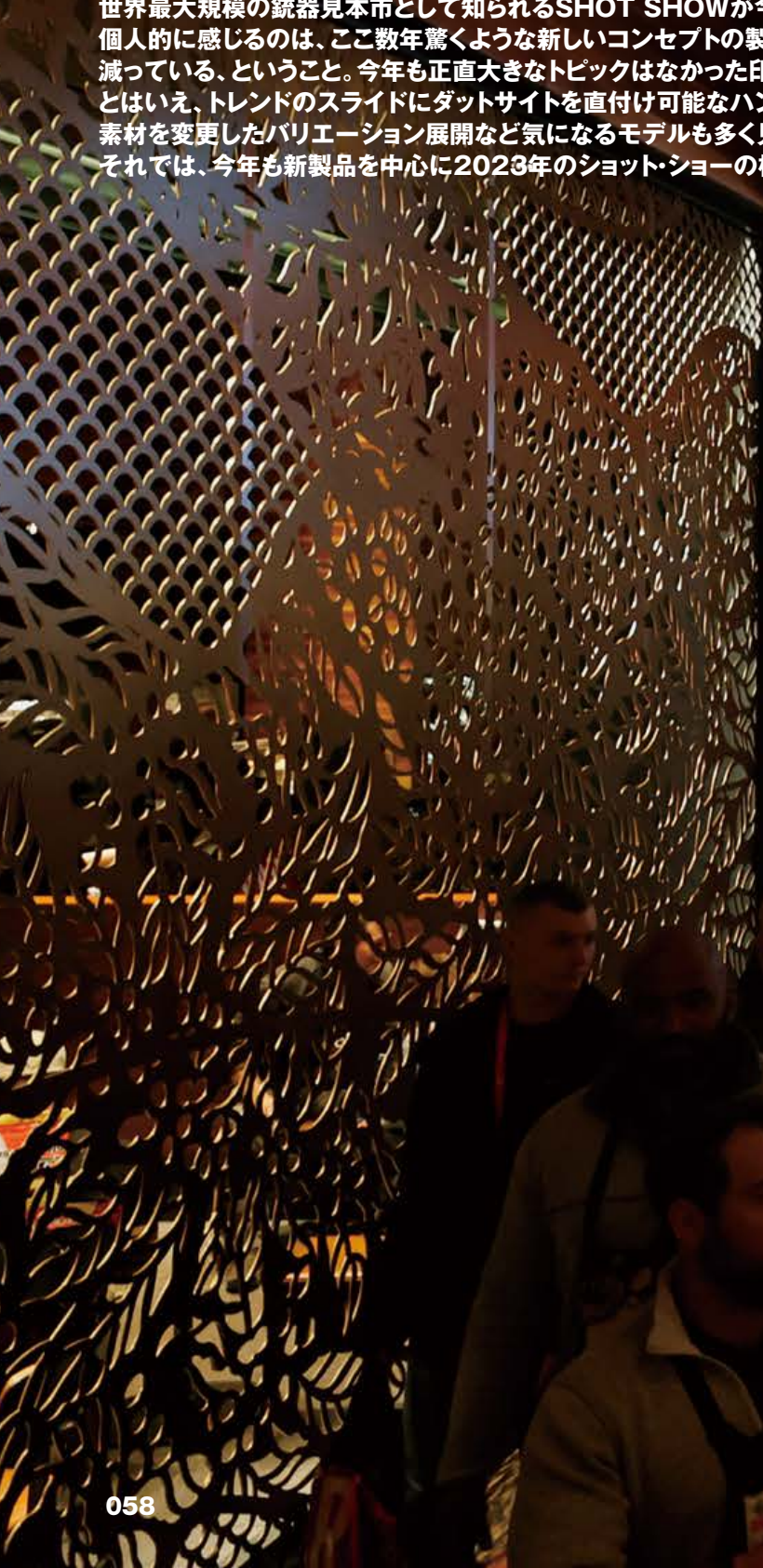
新会場となったシザーズ・フォーラム側からベネチアン/バラッソ側へ向かう際の橋へ向かう途中の様子。シザーズ・フォーラムの建物は新しく、内部はモダンでとても綺麗な。



シザーズ・フォーラム側には、警察車両が待機し「Welcome To The Shot Show」のサインが設置されていた。まだ新しいエリアだからか人の数が少なく、ショット・ショーの会場と認識されていなかったのかもしれない。



新しいエリアとなるシザーズ・フォーラムには銃器や弾薬関連ではない製品を取り扱う企業用にマーケット・プレイスも用意されていた。また装甲車の展示など、エンターテインメントの要素もあったように思う。



ベネチアンとシザーズ・フォーラムを結ぶ橋。昨年からのこの橋を渡ってシザーズ・フォーラム側に行くようになった。この会場拡張により、2023年のショット・ショーの会場サイズは、過去最大の東京ドーム約1.6個分相当となった。



ベネチアン側の外には、ード・コートが用意され、多くの人で賑わっていた。

ショット・ショー初日終了時の様子。アメリカでは、行政レベルのマスク着用義務は屋内外を問わずに完全撤廃されており、マスク着用者を見る機会は激減した。

SPRINGFIELD MEU PISTOL



スライド・ストップの後、スライドを少し後退させると自動的にスライド・リリース・レバーが下がるPBシステムを組み込んだリリース・レバーを採用。マガジン・チェンジから次の発射まで、スピーディに移行することができる。

リコイル・システムは、ベーシックなM1911スタイル。シンプルながら迫力の.45口径マズルが強烈なストップング・パワーを暗示する。



スライドにSFAそのまものモデル名と口径表示。刻印類は、すべて彫刻機で深くシャープに刻まれている。

高精度クロン・ガバメントをベースに、戦うことだけを追求してカスタム・アップされたMEUピストル。ガバメントらしい外観と、現行・最新のマグナメカが叩き出す迫力のキックが味わえる強かなガバメントだ。



仕上げられている。キングス・タイプのアンピセフティやノバック・タイプのリア・サイト、インデックス付のハイライド・ビーバー・テール、ラップ・アラウンドのラバー・グリップなど、外装パーツも以前のモデル同様。軍用を強く意識したランヤード付きのメインスプリング・ハウジングは、アーチ型のパーツをストレートに削り直し、20piのグリーブを刻んだカスタム・パーツが組み合わされている。

ガバメントの中のカバメントを思わせるWAの“SFAミュー・ピストル／バトルダメージ・バージョン”。今

なら新春特別価格¥42,570円(通常価格¥47,300)で手に入れることができる。生粋のM1911ファン、カスタムガバメントファン、そして米海兵隊ファンはこのチャンスを見逃すな!!

また、MEUによく似合うアクセサリとして、海兵隊メンバーが作戦によって選択使用している10連マガジンを再現した“WA28ラウンド・ロング・マガジン (価格¥6,380)”も好評発売中。ガス容量を増幅したロング・マガジンは、作動感もさらにスピーディで迫力が増す。MEU専用のアクセサリとして、本体と一緒にコレクションしよう。



WESTERN ARMS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
 〓ウエスタン アームズ 〓03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>

S&W M4013TSW LIGHTNING CUSTOM

アクセサリ・レールを装備するS&Wのタクティカル・コンパクトオート、M4013TSWにライトニング・カットを追加したカスタムVer.が新登場!



※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様異なる場合があります。

ミリタリー・ラウンダップ!

Militaria Roundup!

ヒトラーユーゲントとWW2

ミリタリー・ショーでもしばしば目にするヒトラーユーゲント・ユニフォームの着装。
ヒトラーユーゲントはナチ党の青年組織として編成され、第2次大戦後期では戦いに動員されたことでも知られる。
今回は一般団員の複製ユニフォームをメインに、第2次大戦におけるヒトラーユーゲントに目を向けてみよう。

解説／菊月俊之 写真／青木健格
サムズミリタリ屋☎03-6680-4648 <https://www.sams-militariya.com>、カンパバタリオン!! ☎042-309-1911 <http://www.kampfbataillon.com>

ナチスの青少年組織／ヒトラーユーゲント

ナチス・ドイツ第3帝国の青年組織“ヒトラーユーゲント（Hitlerjugend）”はナチ党（NSDAP）結成初期に組織された党青年部がルーツで、最初は突撃隊（SA）の下部組織だった。これが1932年に突撃隊から独立してヒトラーユーゲントとなり、ナチ党の政権掌握後はドイツの青少年を統制するための組織となっている。ちなみに“ヒトラーユーゲント”は複数のナチ党青年組織の総称で、①少年団（DJ/10～14歳）、②青年団（HJ/14～18歳）、③少女団（JM/10～14歳）④処女団（BDM/14～18歳）の4組織から構成されていた（本稿では組織全体を「ヒトラーユーゲント」。青年団を「HJ」として区別した）。

ヒトラーユーゲントへの入団は個人の自由だったが、1939年に入団が義務化されて違反者には罰則が科された。団員にはナチのイデオロギーに基づく教育が行なわれたが、これが大戦末期に動員された彼らが熱狂的に戦う上で大きく影響している。一方、アメリカ軍がドイツ降伏後に捕虜となった団員に行なったアンケートでは、彼らが必ずしもナチ党の思想に共鳴していないという意外な結果も出ている。ただし、質問側は「質問者が答えて欲しい回答を選んだ可能性もある」とコメントしているが……。

ヒトラーユーゲント徽章 HITLERJUGEND-ABZEICHEN

HJ徽章は時期によってデザインが変化しており、大戦中に着用されたのは1933年に制定された菱形のもの。徽章は①一般用、②黄金章（Das Goldene HJ Abzeichen）、③柏葉付き黄金章（Das Goldenes HJ Ehrenzeichen mit Eichenlaub）の3種類が存在。②は在団期間や功績に対して授与され、③はとくに顕著な功績を立てた者に対する表彰として授与された。①の着用は在団期間のみに限定されたが、②と③はその後も着用が認められた。金属製のHJ徽章はシャツとジャケットの左胸ポケットに着用する。



一般章

（撮影協力：カンパバタリオン!!/Gw0019 ヒトラーユーゲント バッジ 一般/価格2200円）



黄金章

（撮影協力：カンパバタリオン!!/Gw0025 ユーゲントリーダー 金バッジ/価格3300円）



柏葉付き黄金章

（撮影協力：カンパバタリオン!!/Gw0091 HJ金枠高級リーダー章/価格4400円）



複製品HJ章（写真は柏葉付き黄金章）背面のマーキング。下のRZMのロゴはナチ党需品管理局（Reichszeugmeisterei der NSDAP）のもので、上のBM 1/122が製造メーカーの番号。



戦前のニュルンベルク党大会でヒトラーユーゲント団員を接見するナチ党党首のアドルフ・ヒトラー。ヒトラーユーゲントの役割はナチ党指導者の養成だったが、戦争突入後は準軍事組織として機能するようになる。ヒトラー左後方の人物が初代帝国ヒトラーユーゲント指導者のバルドゥール・フォン・シーラッハ。

兵士育成のための組織として機能

初期のヒトラーユーゲントはナチ党指導者の育成を目的としていたが、ドイツが再軍備を宣言した後は未来の兵士を養成する準軍事組織へと変化していった。HJの訓練組織には①自動車、②海洋、③航空、④通信、⑤山岳、⑥医療、⑦衛生管理、⑧軍楽隊、⑨パトロール隊が存在。これら組織は技術を習得できることからHJ団員には人気が高かった。そして訓練にはナチ党の各組織や国防軍、そしてSS（親衛隊）が協力している。

1939年に第2次大戦が勃発するとHJの役割も大きく変化し、国内の人手不足を補うために動員され、空軍対空砲部隊の補助員（Luftwaffenhelfer）として軍に参加するなど軍事色を強めていった。そして20歳の徴兵年齢に達した者（戦前は20歳で、戦争突入後に18歳）は本物の兵士として入隊したが、元HJ指揮官層の約9割が陸軍のエリート部隊グロースドイツチュラント師団に入隊したという。また1943年には18歳のHJ団員により、後述する第12SS戦車師団が編成される。

戦争が長期化すると徴兵年齢に達しないHJ団員にも軍事訓練が施され、17～18歳の団員は実戦経験を持つ陸軍や武装SSの軍人から各種兵器の操作を教育された。そして大戦末期には徴兵年齢が16歳に引き下げられたことで多くのHJ団員が軍や武装SSに入隊したほか、16歳から60歳の男子で編成された国民突撃隊（Volkssturm、後述）に参加し、西側連合軍やソ連軍を相手の戦いに参加している。

夏期ユニフォーム DIENSTANZUG(SOMMER)

HJのユニフォームは夏期用と冬期用に分かれ、夏期用の着用期間は4月15日から10月14日までとされていた。ここで紹介するのは一般団員のユニフォームで、褐色（俗にナチ・ブラウンと呼ばれる）のシャツと帽子、そして黒の半ズボンで構成される。半ズボンにはグレーのひざ下丈ソックスと茶色の革靴を履いたが、ドイツ南部のバイエルンとオーストリアの団員は白のソックスを着用した。

シャツの左袖には所属管区章とHJ腕章、そして両肩に階級肩章を着用。ベルトは左肩から斜めに掛けるストラップの付いた黒革製を着用した。ちなみにシャツの色である褐色はナチ党ユニフォームの色として使用されたものだが、これはナチ党結成当初に入手したサブリサスのドイツ帝国軍熟帯用シャツを、党の制服として着用したのが始まりだった。

シャツ HJ-HEMD

夏期ユニフォームの上衣として着用された褐色の長袖シャツ。頭から被って着るプルオーバー式で、胸にフラップ（雨蓋）とプリーツの付いたポケットが付く。複製品には左袖に所属管区徽章が付くが、これを外せばナチ党組織のユニフォームやSSのシャツとしても使用できる。複製品のサイズはM,L,XLと36（S）,38（M）,40（L）の別があるので、購入時は要確認。（撮影協力：サムズミリタリ屋/WW2・ナチスドイツ・HJ用ブラウンシャツ/価格4820円）



袖口

シャツの袖口はカフスの角を斜めに裁断したカットウェイと呼ばれるタイプで、スポーツーなデザインとされるもの。袖はおろした状態で着用するが、夏期に気温が高い場合などは袖まくりして着用した。



半ズボン HJ-KURZHOSE

HJの夏期ユニフォームの半ズボンは褐色と黒の2種類が着用されたが、1936年頃に黒で統一された。ポケットはサイドとヒップの計4つだが、ヒップ・ポケットはジャケットのようなプリーツとフラップ（雨蓋）が付く凝ったデザインが特徴。半ズボン着用時にはひざ下丈の長いソックスを着用する。（撮影協力：サムズミリタリ屋/ヒトラーユーゲント・ショートパンツ/価格6380円）



スカーフ HALSTUH & KLÖPPEL

ヒトラーユーゲントでは男女を問わず黒のスカーフ（ネッカチーフ）を制服の一部として着用した。ヒトラーユーゲントのスカーフはボーイスカウトのスカーフと同じ性格を持つもので、首の日焼け防止のほか、三角巾や包帯としても用いる。ボーイスカウトでは隊ごとに色が異なるが、ヒトラーユーゲントは黒で統一されていた。（撮影協力：サムズミリタリ屋/ヒトラーユーゲント・スカーフ&留め具SET/価格2200円）



肩章用ループ&ボタン

シャツの両肩には階級章としての肩章を着用するため、装着用のボタンとループが付く。ボタンの襟側寄りにかがり穴（ボタンホール）が設けられているが、用途は不明。



スカーフはシャツの襟下に巻いて正面を“ワグル（ドイツ語では“Klöppel”）”と呼ばれる留め具で首元を締める。ワグルにはさまざまなタイプが存在するが、ヒトラーユーゲントでは茶色の革を編んだものを使用。スカーフは夏期と冬期のユニフォームの双方で着用する。



夏期用肩章

HJの肩章は階級章で、大戦中に着用されたのは1938年に制定されたもの。色はユニフォーム（カーキと黒）と同じで、軍の肩章の兵科色に相当する縁取りが付いた。ここで紹介する複製品は一般HJの赤となっている。（撮影協力：サムズミリタリ屋/ヒトラーユーゲント・1stパターン肩章カーキ No.227/価格1980円）



襟の後方にはスカーフがずれるのを防ぐ目的でボタンが設けられている。

ポケット

両胸にはプリーツ（ひだ）とボタンで閉じるフラップ（雨蓋）の付いたポケットが付く。デザインは陸軍やナチ党の制服と同様の凝ったもの。ボタンは前合わせおよび階級肩章用のものと同じく、表面が梨地加工された金属製。



バック・ストラップ（尾錠）

半ズボンにはベルト通しが付いているが、それとは別にウエストサイズを調節するバックストラップ（尾錠）が左右に付いた。





実銃のM1911A1にもさまざまなタイプが存在するが、東京マルイはスライド右面に一切刻印がないソリッドなモデルを選択。どこか謎めいた独特なムードを醸し出す。



バレルブッシングの内側には滑りの良い樹脂製サポートリング。滑らかな作動をもたらすと同時にアウターバレルの傷防止にもなるオリジナルな工夫だ。

スライドストップ・ノッチの割れや破損を防止する東京マルイのアイデア抜群パーツ「メタルノッチ・スパーサー」。このM1911A1から採用された。



TOKYO
MARUI

ミリガバ図鑑

現在、東京マルイのWEBサイト上「ガスブローバック／ガバメント」の項目には16機種、「ハイキャバ」に6機種、「Rシリーズ」2機種、「フルオート」1機種、さらに「電動ガン・ハンドガンタイプ」に1機種、「電動ブローバック」に3機種、「エアーハンドガン」にも2機種と、膨大な「ガバ系」が並ぶ。その数じつに全30モデルという大所帯だ。今月のM1911特集にちなんだ本稿では「①シングルスタック」「②米軍が制式採用」という2条件を満たすもののみを「ミリガバ」と定義し紹介する。

Photo & Text by Takeo Ishii 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp



「リアルさと実用性のバランス」を ハイレベルに実現!



GAS BLOWBACK M1911A1 Colt Government
●全長:218mm ●インナーバレル長:112.5mm
●重量:798g ●装弾数:26+1発
●2006年6月29日発売 ●価格18,480円

控えめなトリガー、グリップセフティ。アーチ型のランヤード金具付きハウジング。位置といい形といい動きといい、後のすべての拳銃に影響を与えたセフティ等、M1911A1ならではの機能美を堪能できる。

HOP-UPはスライドを外して行なう方式。工具も要らず、アジャスト位置も目視できる素晴らしい設計。



実銃M1911のメカニズムには取
えて拘らず、エアソフトガンと
しての実用性と機能を追求した
メカニズムが集約されたインナ
ーシャーンをABS樹脂
製フレームに組み合わせた
構造が美しい。



グリップは米軍採用モデルに装着されていた樹脂製のものを模している。内部には超大型のウェイトが仕込まれ、左右合わせて160g以上の重量を稼いでいる。



- M1911A1コルトガバメント用スベアマガジン(奥) 価格3,168円
- ガバメント用クロームステンレスマガジン(手前) 価格3,520円

薄型シングルスタックながら驚異的なガス効率を誇るマガジン。装弾数も26発と実銃の4倍以上!



マルイのM1911A1 ガスブローバックは、大ベストセラーとなった「ハイキャバV5.1」発売から約2年後に登場した。いわゆる「架空銃」だったハイキャバとは異なり、既に幾多の先行モデルが世に送り出されていたミリガバ=M1911A1では他者を凌駕する徹底したリアリティを求められる上、薄いシングルスタック・マガジンを使う事からガスブローバックとしてはハンデもある。業界・ファンが固唾を飲んで注目する中で発売されたマルイM1911A1は期待通りの、いや、それ以上のパフォーマンス、実射性能、リアリティをも見せつけ、以後のシリーズ展開につながる「スタンダードとしての地位」を美事に築いたのである。



GAS BLOWBACK Colt Government Series'70 Nickel Finish
●全長:217mm ●インナーバレル長:112.5mm
●重量:812g ●装弾数:26+1発
●2013年7月31日発売 ●価格21,780円



GAS BLOWBACK Colt Government MarkIV Series'70
●全長:217mm ●インナーバレル長:112.5mm
●重量:799g ●装弾数:26+1発
●2012年2月29日発売 ●価格19,580円



シリーズ'70ではリアルなスチールブルー仕上げと&ヘアライン処理で1970年代のコマーシャル(=民間用)・ガバメントならではの「美」を表現!



【CWT運営よりコメント】
初企画にも関わらず、多くの方々にご参加いただき嬉しかったです。次回
のCWTは目玉の特殊ゲームを始め、運営一同もさらに進化した最高にア
ツイイベントを目指します！ 皆様の“私服×ギア”から新しい“可能
性”が生まれることを楽しみにしています。夏にまたお会いしましょう！

DJちゅうの GEARHEADS JUNCTION

Casual Wear Tactics カジュアルウェア タクティクス

GEARHEADS: [ギアヘッズ]
熱狂的な装備フリーク—
JUNCTION: [ジャンクション]
接合、連接、交差点または分岐点—

#CasualWear
Tactics #CWT

写真・文/DJちゅう 場所/サバゲーパラダイス

“私服×ミリタリーギア”をテーマに撮影やサバゲーを全力で楽しもう！という、プレイヤー達のコタワリが随所に垣間見える「カジュアルウェアタクティクス（以下、CWT）」。

今回が初開催となる当イベントだったが、蓋を開ければ約130人もの参加者が集い、コンシールドキャリアを用いて行なわれたVIP護衛戦などの特殊ゲームや、サバパラが誇る最高のシチュエーションでの撮影会など、1日を通して大いに盛り上がりを見せた。そんなCWTに参加したイケてるギアヘッズたちをピックアップ！

らっこさん(左)はジャケット+コートにマイクロチェストでスマートな印象に。マサクロさん(中央)はGUで揃えたという着飾らないシンプルな私服にマイクロチェスト。TAIGAさん(右)はBEAMSやVOLCOMなどのカジュアルな寒い日の普段着にFirstSpear製DasDingが映えます。主催による三者三様のコーディネートは、CWTに向けたコーディネートの方向性の参考になって非常にいいですね。運営お疲れ様でした！





MLRS

Multiple Launch Rocket System

陸上自衛隊には冷戦末期に集中的に配備を進めた装備がある。
それが多連装ロケットシステムMLRSだ。

北海道と九州に配備され、対中、対口の要となる存在となる。
引退の日は迫るが、日本の安全保障上、絶対不可欠な装備である。

陸上自衛隊は島嶼防衛強化を図るべく、大改編を実施している真っ最中だ。部隊を新編したり、装備を更新したりと、新しい戦術にマッチさせようと改革が続いている。

この動きの中で、再注目を浴びているのが多連装ロケットシステムMLRS (Multiple Launch Rocket System) だ。

1970年代、アメリカは、敵陣地めが

けてロケット弾を連続して撃ちこみ、圧倒的火力をもって、面で一気に制圧できる多連装ロケットシステムの開発に着手する。イギリスや西ドイツなど西側数カ国も開発に加わり、その結果1980年にMLRSが完成した。そして1982年から量産が開始されていく。

MLRSの外観は、装軌式の移動式土台の上に箱型ロケットランチャーが搭載されたシンプルなデザインだ。

このランチャーからM26ロケット弾であれば12発発射できる。射撃後、スムーズに再装填が行なえるように、6発がひとまとまりとなったコンテナモジュール型カートリッジを採用。ひとつの発射機に2個のコンテナが差し込まれている形となる。射撃後は、コンテナを引き抜き、新たに弾が入ったコンテナを差し込む方法をとるため、12発すべてを再装填する

場合でも作業時間は10分もかからない。射距離が長いのも特徴で、M26A1という弾種であれば、約40kmも飛翔できる。

米陸軍をはじめ、世界13カ国が配備しており、日本もそのひとつ。1992年から野戦特科(砲兵)部隊へと配備を開始した。国内にてライセンス生産され、最終的な調達数は99両となった。しかしながら、MLRSが揃った時

特科部隊が扱う多連装ロケットシステムMLRS。陸自では着上陸阻止の手段として期待されており、北海道と九州にのみ配備されている。間もなく引退が迫る装備ではあるが、島嶼防衛には必要不可欠であると見直されている。